

読書通信



No. 153

① 環境史観をご存じだろうか。私見によれば地球環境を歴史的に探ることによって文明の特質を解明し、歴史的視点に立った生き方を提示する学問である。その基本には環境考古学があるが、その第一人者による大著、安田喜憲『人類一万年の文明論』（東洋経済新報社、2592円）は業界紙に長期掲載された時評から成る。『一神教の闇』『稲作漁撈文明』『山は市場原理主義と闘っている』など著者の名著のエッセンスに再三、言及しつつ、グローバリズムと市場原理主義を厳しく論難している。一方で、自

然と共存するアニミズム文明、資源循環利用、森を守る島国根性、地震予知のための年縞研究、防潮堤より防潮林など話題は多様に広がる。物質文明偏重やマネー至上主義から離れて自然との共生を考えたい人には格好の書である。

② 個人的には中国・アメリカ産の食品は全面的に遠慮してきたが、奥野修司・徳山大樹『怖い中国食品、不気味なアメリカ食品』（講談社文庫、799円）は徹底的に中国の現場を踏んでレポートしていて、どれも驚くべき劣悪さだ。不衛生極まりないだけではない。有害物質に対する観念がまるでない。それを「自分たちが食べるのではないから」と言って製造出荷する。

一方、アメリカ産で怖いのは牛、豚、鶏肉に含まれる化学物質で、特に成長促進のためのホ

ルモン（エストロゲン）が大量に含まれていて、日本では乳がんの激増、成長や生殖への重大な影響が報告されている。もう一つ怖いのはGM作物で、特にGMとうもろこしが加工品に多用されて日本人の体内に入り込んでいるという。

一次産品は気をつけられても、加工品は内実を知りようがない点で、中国、アメリカどちらも怖いと言うしかない。数年前、「週刊文春」に連載された大きな反響を呼んだ記事を加筆して文庫化した本書は、特に若い世代には必読と思う。③ アベノミクスのおかげで日本経済の停滞が打破できたと安倍首相は言うが、本当だろうか。明石順平『アベノミクスによろしく』（インターナショナル新書、799円）はアベノミクスの実態を厳しく追及、批判している。成長率は民

主党政権時代よりはるかに低く、国内実質消費は戦後最悪の下落率で、株高は超金融緩和と日銀のETF買いのおかげ、など徹底的で具体的な批判が続く。架空の掛け合いは稚拙だが、たくさんのグラフはみな明快で首相の誇示する成果とは真逆の実態が明らかにされる。

④ 菅官房長官に記者会見でたびたび食い下がって一躍、名を馳せた東京新聞記者の半生記。望月衣塑子『新聞記者』（角川新書、864円）は、しつこく食い下がることが記者の基本であることを過去の取材も振り返りつつ語っている。官邸の広報記者もどきの多いマスコミの現状と、その政局記事の限界がよくわかる。政治が良くなるのも悪くなるのも、記者一人ひとりにかかっていると改めて痛感した。（浅野 純次）